

坂道の家

遠藤 隆

秋の夕暮れ時。

ゆるやかな坂を下ったところにその白い家はある。

一階は、今は、もう閉ざされたままのガレージとなっている。

玄関は、二階にあり、入り口まで煉瓦で造られた赤茶けた十段ほどの階段が続いている。

夕暮れが近づくと、その階段の中ほどに、主の老人が、坂道の様子を窺いながら座っている姿がある。

坂の上には、セイタカアワダチ草の黄色い花が、夕日を受けキラキラと黄金色に輝いている。

やがて、その黄色い光の中から、スーパーのロゴの入った大きな袋を二つ下げた妻が、長い影を連れて、ポツリ、ポツリと坂を下ってくる。

その姿を認めると、夫も徐に立ち上がり、ポツリ、ポツリと煉瓦造りの階段を降り、妻の方に向かって歩みはじめ、坂道の真ん中あたりで二人は出会う。

夫は、妻から袋を一つ受け取り、後ろ手にそれを抱え、二人で再びポツリ、ポツリと、白い家に向って歩み始める。

落ち合った二人には言葉はない。
言葉は、すでに擦り切れている。

しかし、寄り添う影が、すべてを語っている。

夫は、門扉を開け、妻は、重そうに扉を閉める。

もう何万回も登った煉瓦の階段で、二人は遠い昔を思い出すだろう。

新入社員の頃、階段を二段飛ばしで会社に向かったことを。

子供たちの手を引きながら、「子供達の未来の光」を夢みたことを。

孫たちに手を引かれ、「彼らの明日」を描いたことを。

やがて、一室だけに明かりが灯され、二人だけの夕餉が始まる。

今日を語り、明日を声高に伝えるテレビや新聞は、もはや二人には必要はない。

妻は、遠い昔を思い出すように、ふっと「笑み」を浮かべる。

夫は、思う。過ぎ去った昔を「笑み」で迎えることができるのは、幸せな人生だったと。

食後、夫は、食器を妻が立つ台所に運ぶ。二人の間には、決められたルールすら存在しない。

食事が終わり、やがて、部屋の明かりを消すとき、二人は思う。

もし、自分が倒れれば、相手も消える。だから、明日も相手のために生きよう。